

明日の県立図書館を思う
下老正進さん(NHK津放送局ディレクター)

現在の県立図書館

閉架が多すぎると思う。古い本が手にできないのは、本好きとして淋しい。

マイクロフィルムの欠損をカウンターの人が知らないケースがあった。新聞社にもないような資料なので、リスト化するなどして使いやすいようにしてほしい。

一時司書のサービスを「コンシェルジュ」を名乗ったことがあるが、利用者に声かけするわけでもなく、それとは程遠いと感じた。

文学コーナーはいつも見ている。固定ファンはいるはずだ。

講演会などで関連本を並べるなどは良いこと。十進法によらない、セレクトショップのような展示もあってよい。

ビジネス支援を始めたというが、知らないから来ない。やることはビジネス支援だけか？調べ物のプロなど、もっと司書のみなさんの適性に合った方針があるのではないか。

地域コーナーは狭い。

県立図書館のあり方(地域資料)

県立図書館は何者であるのか。「色づけ」が必要。売り文句になりえるのは、「三重県に関する本はすべてある」。それには、『みえの本』に載せるものはすべて揃えるべき。

そして売り文句は宣伝すること。旗を立てないと資料は集まらない。三重県は江戸時代から豊かな地域で古いものが多い。伊賀の山奥の土蔵にも貴重な書籍が眠っているとおもう。壊される前に、親類・縁者から献本してもらえないだろうか。

県内出版社と協定を結んで献本してもらおう仕組みを作ってはどうか。(国立国会図書館の方式)

伊勢湾台風50年の仕事をしたとき、資料のありかがバラバラで困った。地域資料をまとめておくことも必要。

古文書はデータ化が必要。明治時代の紙はもろい。

サービスのあり方

質の高いサービスをすることでみんなから信頼される図書館でいられる。利用者が求めないと出てこないのはサービスではない。

サービスは接客で養われる。客が喜ばないような自己満足ではだめ。客の満足度をはかる指標が必要。

開館時間

週に一度くらいは21時まで開館していてもいいのではないか。

図書館の楽しみ方

本がいっぱいあるのが好き。館内をふらふらと、目的もなく眺めて回る。それで、興味のない宇宙の本も読んだものだ。

明日の県立図書館を思う
下老正進さん(NHK津放送局ディレクター)

子どもに対して

子どもが本好きになるように、継続的に何かをやらせたい。ボーイスカウト、少年団のようなもの。夏休みに図書係教育セミナー(連続講座)とか。

教科書にない本を読むこと、本を読み解いた達成感を味わわせたい。

サービスを学ぶ

あるラジオ番組で聞いたスーパー司書(市川市、国立市)は、ディスプレイの方法、コンシエルジュ的なサービスについて語っていた。鳥羽水族館は、魚について子どもに興味を植え付ける方法を知っている。夜間の水族館で宿泊してみるなど、紹介の仕方がおもしろい。

県立図書館のあり方(市町支援)

市町図書館への支援も必要。県は市をひっぱり、情報提供をする立場。双方のコンセンサスは必要であろう。

県立が市町図書館のバックヤードになることもありだが、バックヤードだけにするにはもったいない建物だ。